

一如日重の行法観

——近世日蓮宗教学の原点——

一如日重（一五四九—一六二三）は近世初頭の京都日蓮教団の重鎮であり、不受不施問題が起きた時には教団意見のとりまとめに当り、不受不施義を主張する仏性日奥（一五六五—一六三〇）の攻撃を受けたが、いわゆる宗門中興の三師の筆頭に列せられ、近世日蓮宗教学の原点をなす人物とされている。師の教学の特色は五種妙行論であるとされるが、師の主著である『見聞愚案記』によつて行法受容の視座からその構造を追求し、かつ日奥と対比してみよう。

望月歆厚博士が述べているとおり、日重はすぐれた理論家であるよりも実際の信仰を重んじているのであつて、いわゆる五種妙行論についても必ずしも鋭い思索のもとに整足されているとは言ひ難い。しかし、受持・読・誦・解説・書写の五種行の行じ方と信仰の指針との接合が日重にとつて重大な問題であつたことは、愚案記の巻頭の項を含めて約二十項に説述が及んでいることから推察されよう。言うまでもなく

渡 辺 宝 陽

五種法師は法華經法師品第十・法師功德品第十九・常不輕菩薩品第二十・如來神力品第二十一等の各所に説かれており、また受持・読誦と用字されていることも多いが、如説修行の内容容として語られていると理解される。日蓮聖人においては「受持の一行」のみが強調され、題目の専唱、法華經の行者としての実践がそこに要約されていて、他の四種行との関連はほとんど述べられていない。（僅かに定遺一〇三「得受職人功德法門鈔」、二五六「日女御前御返事」、「御義口伝」等の真蹟不存の諸書に五種法師の名を散見するのみで、しかも五種各行の関連にはふれてない。）もつとも「四信五品抄」には「制止止檀戒等五度一向令レ称三南無妙法蓮華經」為二念信解初隨喜之氣分也。是則此經本意也」（定遺一二九六頁）と述べ、また「初心者兼行三度一妨三正業信一也。……云三直專持此經者非レ互三經、專持三題目不レ雜三余文三尚不レ許三一經読誦、何況五度」（同一二九七頁）と、法華文句第九卷の文を引照しつつ述べている

が、これは受持一行に五種妙行を収約したと見られる。しかし聖人滅後の教學展開においては、日常の行法における受持正行に対する助行として観念觀法的側面が問題となり、五種行が受持行を中心として統一的に理解される信仰構造において五種妙行論が諸師によつて主張されている。例えばそれは行學日朝、慶林日隆、啓運日澄、広蔵日辰等各門流諸師の教學に見られるところである。

日重の五種妙行論は啓運日澄等から継承されたものであろうが、日重において特に重視されているのはいかなる理由によるものであろうか。そこで注目されるのは『愚案記』巻頭の文章である。

就三業修行ニ法華經有得意思 大段如說修行ト云ハ受持等ノ五種ニ修行スルヲ云フ歟。常ニハ不。惜。身。命。ノ事ヲ云フ様ニ意得ル也。勿論夫レモ、如說修行ノ攝属ニテハ有トモ、正ク此經ノ如說修行ト云ハ受持等ノ五種ニ修行スル事也。(同一二一)

日蓮聖人の『如說修行抄』に示されるような法華經の不惜身命の信受・弘經が上代日蓮宗において如說修行のあり方として伝統されていたのに対し、日重はこの文章においてそのような如說修行のあり方の他に、受持に収約される五種行を仏説の如く受けつつそれを日常的生活のなかで修行する必要を強調していると見られる。すなわち前引の文につづいて「付レ之五種ノ行ガ三業ノ行也、受持ハ意業、読・誦・解説

ハ口業、書寫ハ身業也、釈ノ心也、受持無行余行徒然トテ受持ガ肝心也」と五種行を三業に配し、受持の肝心であることを述べているが、具体的な行に即して日重は、「所詮、五種ノ修行ニハ意業ノ受持ガ肝心也、七字ノ唱題ノ行ニハ口業ガ肝心、読誦ニハ身業ガ肝心也、能々可レ留意、日重ガ已証也、猶案レ之宗義ノ心ニ落居スル事肝心也」(同一二三)と述べ、受持とは意業であると規定し重視していることが知られる。受持を意業として重視するとはいかなる意味であらうか。唱題について「就ニ唱題立行ニ又三業ノ通局アリ、意ニ七字ヲ信ズルト日題目ナド書キ口ニ唱ルト、是三業ノ行也、此ノ三業ノ中ニハ口業ニ唱ルガ肝要也」(同一二二)と、唱題は口業を肝要とするのであれば、受持意業とは信力の相続ということになるであらう。「師弟相對シテ於ニ仏前ニ從ニ今身ニ至ニ仏身ニ能持南無妙法蓮華經ト三遍受ル是受也。此ヲ受タル如ク一期生不斷ニ持テ信シ唱ルヲ持ト云也、御書ニ云ク受ルハ安ク持ツハ難シ、成仏ハ持ニアリ文、受法ト云名目可レ思レ之、去バ五種ノ行ノ中ニハ受持意業修行肝心也最要也」(同一三三)と、正法に歸し唱導の師より受法した法華經を信力をもつて持ちつづけることが受持の内容となる。

次に読誦身業については、日蓮聖人が竜口法難後、弟子日朗に与えた『土籠御書』を引用して「法華經ヲ読誦スルニ付テ身業ノ読誦ガ肝心也」(同一三三)と述べているが、法華經の

色説、すなわち法華經の行者が末法において弘經するときは必ず法難に会うという予言を體現することを意味するものである。このように、法華經行者の値難意識の昂まりにおいて示された色説の教誡を、日常的な信仰のなかに読誦身業としてどのように定着させるべきか、それが日重自身における信仰と教学との中心課題であつた。

仏性日奥が自身を法華經行者の先蹤にならう者として自己を規定し、不受不施義を宗義制法として繼承した行き方と對比してみれば、明瞭に日重と日奥との関心の相違を見ることができよう。日奥は『門流清濁決疑集』において日蓮聖人の「頼基抄」（四糸金吾殿御消息「定遺五〇四頁」）の「今度法華經の行者として流罪死罪に及ぶ。……娑婆世界の中には日本国、日本国の中には相模国、相模国の中には片瀬、片瀬の中には竜口に、日蓮が命をとめをく事は、法華經の御故なれば寂光土ともいふべき歟。神力品云、若於林中若於園中若山谷曠野是中乃至而般涅槃とは是歟」の文を引用して、神力品の如説修行にふれている。即ち、神力品の「於如来滅後、应当一心受持読誦解説書写如説修行。所在国土、若有受持読誦解説書写如説修行、若経卷所住之处……当知是处即是道場」を挙げて如説修行が重説されているとし、その如説修行の人の住所を示して道場とは寂光土を意味すると明し、「即是道場者常寂光土宝処也。……末法今時 法華經所坐之处 行者

所住之处 道俗男女貴賤上下所住之处 併皆是寂土也。……」（定遺六九三—四）の「法華宗内証仏法血脉」の文を挙げて、「問云、如説修行人住処即寂光土、対此復謗法誘人住所即可無間地獄乎」（『万代亀鏡録』七三六頁）と、如説修行が謗法の禁断を意味する折伏行であることを既定のこととして述べているのである。仏性日奥にも「五種妙行」の表現が見られないわけではない。しかし、「奥聖鑑拔萃」（『万代亀鏡録』上八三〇頁）には五種行の名が挙げられるのみであり、「研心鏡」（前同書下二七頁）には受持一行が強調されていて五種各々の関連などは全く問題とされていない。「研心鏡」において、名字即の人がただちに宝所に到る（妙樂「文句記」卷七）と説かれるのは法華円經の冲微であつて余經の及ぶところではないとし、この宝所に到る修行に有相行・無相行の二種があつて、無相行は像法千年の機のためであるのに対し、末法においては有相行が機感相應の行として示されていると述べ、更に次のように言う。

有相事行也。不携観念唯信法華文。作受持読誦等五種行是也。但具足五種行諸心難叶故以受持一行定末法要行。……然神力品一品上行付属讚状也。此讚状結文結受持一行付属。是豈非三重中重乎。……深得此意常唱結要唱題、自然開心寂光「住居」十方宝刹、得大智慧大神通大相好大光明大自在。自受法樂樂可無極。（前同書上二七頁）

すなわち、受持は前引の文と照応して神力品に結要された首題を信じ唱えることであつて、その意味において読・誦・解説・書写の四行は略され、ただ受持の一行をもつて末法の要行とされることは言うまでもない。「我等雖三下賤凡夫受三持妙法」即同三仏体。此妙法即為三仏種子「故也」「我等亦如是持三妙法蓮華如意珠、一切諸仏悉共護」(同二七頁)と述べるのも同様の意味であらう。このように、日奥においては題目の信唱、そしてそこに収約される法華經の信受が受持の内容とされるものであつた。

それに対して、日重の五種妙行論は信力相続のための助行を許容するのであつて、そこに行の普遍性が要求され、如説修行解釋の變容があつたと思われるが、それは師の摂受折伏觀と関連し、また師の時代のとらえ方とも関連しているのである。師の論説が折伏を真向から否定しているのでないにしても、末法の初とは五百年のことであるといい、師の時代は前代といささか様相を異にするとの理解が推測されるのであつて、或は如説修行をもつて不惜身命とは解せず受持中心の五種妙行であるといい、或は不惜身命に一時の不惜身命と日常的常恒の不惜身命を立てる(「愚案記」三一五九)ことより見て、日重はすでに強烈な折伏的態度より後退して、むしろ日蓮聖人の弘通を継承しつつ、摂受・折伏義を随宜解釈しようとするものである。

ところで、日重の五種妙行論の論述は天台の章疏によつて進められており、唱題を誦の行として意業を重視することは日誦等から継承されていることも明らかである(「愚案記」三一二四)が、師自ら山門(叡山)の五種の妙行について語っていることは興味深い。

如説修行ト云ハ五種ノ妙行ノ事也。藥王品云○云云、サテ現証ハ山門之行ヲ取テ如法ニ行スル也、是レ如説修行ト云事也、此カ五種ノ妙行也、此時ハ論議解説ノ行ニ当ル也、面白シ。(四一七七)天台宗ノ碩学ノ物語ニ云、吾宗ニ慈恵ノ御正月ナドニ作善ノ時、五種ノ妙行トテ取行也、夫ト者ハマ懺法トテ南岳ノ懺法ヲ本式ノフシナシニ読ム、次ニ五段ノ式アリ、是モフシハ如懺法、初段ニ行事役ニテ法華經一部持テアリヒテ列座ノ衆ニ頂戴サスル也、是受持ノ行也、第二段ニ何レ共一品本ニテ読ム、是読ノ行也、第三ニ仏所成就ヨリ十如是、自我偈ヨリ、誦ノ行也、第四段ニ談義也、是カ長シ、解説ノ行也、第五段ニ以手指一虚空ニ題目ノ七字ヲ書ク、南無ノ二字ヲモ共ニ書ク也、又云、天台宗ニモ日中ナドニハ必一卷經説テ別シテ阿弥陀經ナドハ不レ読、ハテニハ必題目ノ七字ヲ十四五返ト円頓者トヲ読トゾ、能化常ニハ題目唱ヘラレシゾ、当宗ノ唱ル様ニ無テ少シ無調法也(六一一)。

前引文の「藥王品ニ云ク」とは、「若人得聞此法華經、若自書、若教人書、所得功德、以仏智慧、等量多少、不得其辺、……」を指すと思われるが、少くとも前引文による限り日重は山門の五種の妙行を師の五種妙行論の基礎に置いてい

たと見られる。勿論、受持を中心に置く点に天台との教義上の相違を明確にしていることはいうまでもないが、天台の五種妙行が、今、「論義解説の行」として理解できるとする点に、日重の接近が推測できるのである。後引文によれば、天台の五種行は法華懺法に類して行なわれたようであるが、日重には『空過致悔集』二巻、『祖書扶助唱導抄』一卷、『峨玉集』十巻、『峨玉集撮要』一卷等のように、臨終用意のための日蓮聖人遺文抜粹を行なつたものがあり、それに関連して「五悔」について第二十巻（七七一七）第二十三巻（十一二五）に比較的詳しく述べていることが注目される。それによれば、日重は、「五悔大体事、私云、凡ソ行者ノ大体、内順観道外附教行ト云テ、内ニハ三千三観ノ内証ニ住シテ凡聖一如ト開クト云ヘトモ、外ニハ修行ヲ立テテ威儀少モ乱ルベカラザル也、古語ニ云、心ハ本覚ニ住シテ行ハ始覚ニ還ル云云」（二二一一）と、五悔を法華行者の行法として理解しているように思われる。また、日重が五悔のそれぞれについて宗義理解を述べている点からしても、五悔を重視していたことが知られるのである。

生死の無常、罪障消滅臨終正念を課題としつつ題目の受持をもつて懺悔の実践であるとするのが日重の信仰と教学であつたと思われる。たしかに、そこでは日蓮聖人にみられる現実の社会批判を通しての人間観、或はその媒介項となる謗法

の意識がどのように継承されたかが問題となるが、畢竟、静止的な宗教的実存を深めて行くところに日重の関心があり、それを具体的に五種行として深めて行くところとすると、天台の教説を媒介としたところに日重の工夫があつたと思われる。その場合、日蓮教学の究極の境地と天台教学のそれとがどのような関係に立つかは必ずしも伝統的な台当相對の教判では説明し尽されないところがあるであらう。

周知の通り、日重の学系が近世日蓮教団の主流になつて行くと同時に教学の主調をなして行くのであるが、近世日蓮宗教学において行の問題への関心は非常に高いのである。勿論その基底には近世封建体制の確立のなかで呻吟して行く人間の問題が大きくはらまれていると思われるが、その問題に対する日蓮宗教学上の説明、定着は略述した日重の路線において行なわれていると推測される。ただ、日重の教学がどのようにに継承されたかはそれ程単純には断定できないのであるが、法華經受領のための諸行と題目専修受持一行との関連という問題の構造を日重が追求して行つたことが、後の教学において明瞭な軌跡を残さなかつたとしても、根底において多大の影響を与えていることは間違いない事実であらう。

1 『日蓮宗学説史』三五〇頁。2 前掲書、及び執行海秀『日蓮宗教学史』、宮崎英修『不受不施派の源流と展開』。3 茂田井教亨「不受不施者の信仰型態」（大崎学報一〇五号）。